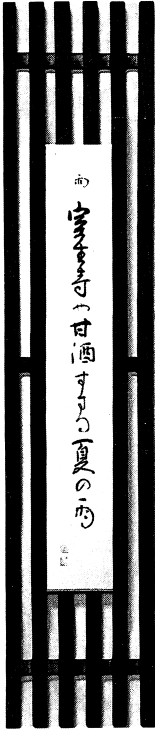


野崎アサエ先生追悼

ご無沙汰を
詫びる心や
薩摩栗

切

ご無沙汰を詫びる心や薩摩栗（昭和六十三年）



雨 室生寺や甘酒する夏の雨（昭和五十四年）



昭和56年11月撮影

野崎アサエ先生

生年 明治四十二年六月二十五日
没年 平成三年三月十六日
満八十一歳



平成2年11月撮影

弔

辭

大 豐

石 嶋

佳

奈 睦

弔

謹んで、野崎アサエ先生のご霊前に申し上げます。

先生、私たち比治山女子短期大学の教職員、そして学生・卒業生一同は、いま、先生と、この世における最も悲しい時に立たされております。余りにも、突然なご逝去でありました。

先生から、最後に頂きました私へのお便りは、発売されたばかりの「さくらめーる」を使用された、入院先からのおはがきで、

「明日三月一日に旭園の自宅に帰り、歩く運動を少しして、学校に出たいと思っております」と結んでありました。そして、「十五日の卒業式に出席することを楽しみにしています」ということでしたのに、その卒業式の日を前にして、再度ご入院、遂に帰らぬ人となりました。どうして、このことを信ずることができずでありましょうか。

先生は、明治四十二年六月二十五日のお生れですから、今年は八十二歳になられます。昭和六年、広島女子専門学校の第一回の卒業生として広島文理科大学国語学国文学科にご入学になり、昭和九年、ご卒業と同時に鹿児島県立第二高等女学校兼鹿児島県立女子師範学校に赴任なさいました。この時期は、先生の、若き日の、教育に捧げられた情熱の最も燃えた時期であったと思いま

辞

す。『文集 野崎アサエ先生に学びて』の中で、教え子たちが、そのことを如実に物語っております。

戦後の昭和二十一年には、広島大学教育学部の前身、広島女子高等師範学校へご転動になり、昭和四十八年に、広島大学を定年ご退職されて後、私共の比治山学園へご赴任頂いたのであります。

比治山女子短期大学へは、実は短期大学創立の昭和四十一年から非常勤講師としてお見え頂いておりましたが、昭和四十八年から専任教授として、また、昭和五十四年からは国文科の主任教授として教鞭をおとり頂き、加えて、入試問題作制委員長、入試問題検討委員長等々の要職を歴任して頂きました。

先生のご研究は、実に巾が広く、卒業論文は、「室町時代小歌の研究」でしたが、古くは「万葉集」から新らしくは「立原道造」にまで及んでおります。先生の、明るい、しかもまろやかで温和なお人柄は、こうした诗情豊かな日本文学のご研究に依るところが大きいのではなからうかと拝察させて頂いておりました。しかし、先生は、豊かな日本の诗情を突き詰められる研究者というよりは、その心を実践に生かされた教育者であったと思うの

であります。わが身の榮達も名聞も全く考えられることなく、ひたすら学生・生徒のために、五十七年間という人生のほとんどを、身を粉にして尽してこられた教育の実践者であられたと思うのであります。

旧臘になりますが、十二月二十日に発刊された比治山女子短期大学新聞にお寄せ頂きました「平成二年秋におもう」の一文は、今は、先生の最後の遺稿となつてしまいました。その中に、私は、先生の教育者としての厳しい、しかし暖かいお心を読みとることができると思ふのであります。それは、授業中、居眠りをおしやべりをする学生に対し、「今の此の時間は、二度とはない」とたしなめられておるのであります。この一期一会の授業態度は、そのまま、みずからに課せられた態度でもあつたと思うのです。かつて、鹿兒島を去るに当たり、そのお別れの式辞で、先生は、「その時その時を、大切に、精一杯すごしました。別れる今になって、未練は少しもありません」と爽やかに挨拶なさ

平成三年三月十八日

つたとお聞きしておりますが、そこに、二度とない一時一時を大切になされ、教育道に徹して生きてこられた崇高なお姿を拝することができると思ふのであります。まこと、先生こそは、生涯を教育に捧げてこられた真の教育者だと思ふのであります。昨年十月二十五日、文部大臣保利耕輔氏は、先生が、教育、特に短期大学教育の発展に尽された功績をたたえ教育功労者として表彰されたのであります。私達も亦、先生を師表と仰ぎ、教育というこの道を歩み続けたい、と心を新たにしておるところでございます。

お名残りはつきないのであります。今は、比治山女子短期大学の発展をこよなく願つて下され、学生の教育に骨身を惜まらずお尽し下さった野崎アサエ先生の、安らかなご冥福をお祈りするばかりでございます。

先生、本当に有難うございました。
安らかにお眠り下さい。

比治山女子短期大学長 豊 嶋 睦

甲

梅が咲き、桜もつぼみをつけはじめ春の訪れが感じられる今日、突然の先生の御訃報に私達学生はとても驚いています。この場においてもまだ信じられません。御訃報をうかがった日は、季節はずれの雪が降っていました。何か不思議な気がします。

私達は入学してから一年間、国文学概論の講義をうけてきました。島崎藤村や室生犀星などの詩を読みながら、日本語の美しさや素晴らしさ、大切さ、おそろしさなどを勉強しました。先生はいろいろなお話をまじえながら熱意あふれる講義をして下さいました。そのお姿に、私達も先生に負けないように勉強しなくては、と思ったものです。

講義をうけている時、先生の厳しい表情を拝見することもありました。先生の優しい笑顔を拝見することもずいぶんありました。私がいちばんよく覚えていますが、ある日、出欠席の確認の際、ある学生が名前を読み違えられたことがありました。その学生からの指摘で間違いにお気づきになった先生は「あら、

平成三年三月十八日

辞

間違えちゃったわ。ごめんなさいね。」とおっしゃってニコッとお笑いになりました。その時の先生のかわいらしい笑顔が忘れられません。

この春から、また先生の講義をうけることができるだろうと期待していました。先生のお話をうかがうことを本当に楽しみにしていました。それなのに、このような形でお別れをしないでいけなくなるなど、誰が想像していたでしょうか。そして淋しいことに、私達は『最後の教え子』になってしまいました。残念ではありません。

私達は、先生に本当によくさんのことを教えていただきました。勉強のことだけではなく、私達の生活態度などについても御指導下さいました。私達はそれらを忘れることなく、心にしっかりと刻みつけて、これからの学園生活を送っていききたいと思えます。先生、今まで私達を御指導下さり、本当にありがとうございます。どうぞ安らかに眠り下さい。さようなら。

比治山女子短期大学学生代表 大 石 佳 奈

(二十五回生)

音 信

清 水 文 雄

野崎さん、あなたが幽界にお入りになってから、早くも三か月が過ぎました。学校に出かけた日に、廊下を隔てた部屋のテーブルに、入口の方を向いて坐っておられたいつもの姿が、今もあるものと思つて、ふとドアを排することもありません。比治山短大で、同僚として一緒に女子教育に携わるようになったのは、この学校が始まつて間もない頃ですから、かれこれ二十五年前ということになります。この年月は、お互いが教師として生きて来た一生の、いわば晩年に当る時期ですが、情性やお負の積もりなど毛頭なかつたことは、改めていうまでもありません。逆に、あなたにとつても、わたしにとつても、生涯の閉じめにふさわしい、静かで充足したひと時を持たせて頂いたことに満足してははずです。そういう「時」をあなたと同じ職場で共有することができたのは、今生で与えられたかけがえのない幸運の一つだと信じています。

さて、今年六月に、わたしは満八十八歳の誕生日を迎えました。有縁の人たちが米寿の祝いをして下さい、嬉しいやら、面映いやら……。あなたが今生におられたら、だれよりも喜んで下さい、あのやさしい笑顔で祝つて下さつたらどうかと、ふと思ひました。これは、あなたとの長いおつきあいの間に、いつの間にか身についた、甘えに似た思ひすごしの癖によるものかも知れませんが、こういう身勝手な迷懐も、幽界のかなたから、かわらぬ笑顔で受けとめて下さっているだろうと思ひます。

あなたが、広島文理大の国語国文学科に入学されたのは、第一期生であつたわたしが三年に進んだ年の春でした。仮校舎の研究室に初めてあなたを迎えた時の印象は今も鮮やかです。あの時の童女さびた面輪は、あなたが今生を去られた今も、あなたを思い起こすたびに、脳裡にそのまま蘇つてまいります。さてわたしも遠からず、あなたが一足先にいつておられる幽界の仲間入りをさせてもらふことになりましょう。

それまでさよなら——

(平成三年六月二十日)

旅

三 上 順

万葉旅行・信州旅行・東北旅行などの国文科の研修旅行で、野崎先生と何度かご一緒させていただいた。それぞれの旅にそれぞれに思ひ出があり懐しい。その中でも特に、昭和五十二年七月の東北旅行が印象に深い。その旅行では前年に続いてご参加の野崎先生が团长を務められた。コースは前年とほぼ同じで、中尊寺・鳴子温泉・最上川・羽黒山・湯殿山・立石寺など、芭蕉の足跡を辿るだけでなく、桂月・光太郎・啄木・賢治・茂吉などのゆかりの地をも訪ねて、国文科にふさわしいみちのくの旅であつた。

さて、その六泊七日の旅も終わりに近づき、仲良くなったバスの運転手さんやガイドさんとの別れが数時間後に迫つていた頃、車内

で思いがけない出来事が起こった。ある学生が歌い終わると、マイクを次にまわさずに、いきなりガイドさんに年令を尋ねたのである。美人のガイドさんの年令が、旅の間、ずっと話題になっていたのを、その学生が代表して尋ねたものらしく、はじめは数人だったのが、やがて大勢で、「幾つですか」「幾つですか」と囃したた。ガイドさんは、皆に嘘はつけないし、さりとて……といった風情で困惑していた。学生のほうには、親しくなったガイドさんをちょっと困らせてやろうといった程度の甘えがあったのかもしれない。騒然となった学生をどう鎮め、その不作法をどう叱ればよいのか、私は迷った。

その時、野崎先生はガイドさんからマイクを借りると、厳しい口調で先ず学生を鎮めた。それから惇々と諭された。「長い旅の間に、お互いの気心も知れ、運転手さんやガイドさん、添乗員さんとも仲良くなるのはまことに結構である。しかし、失礼な質問をした上に、大勢で囃したてて困らせるなどのもつての外、何事もはじめが肝要で、親しくするのはよいが、狎れてはいけない」と、こういった内容だった。車内は静まりかえった。ガイドさんはいかにも安堵したようだった。もし、野崎先生が声を荒らげて学生を怒っていたら、彼女は心苦しかったのではあるまいか。しばし間があった。やがて一人の学生が立ちあがると、途中涙につまりながら、自分たちの不作法と甘えを詫びた。

野崎先生は、学生を叱る時は厳しかった。しかし、その叱られた学生は前にも増して先生を慕うようになる、つまり、怒るのではなくて諭す、そして納得させる、その辺の呼吸が実に見事であった。

これは、無邪気で優しい先生のお人柄に因るものと思う。私には及ぶべくもなく、ただただ羨しい限りであった。

野崎先生を慕っていた学生が、ある時しみじみとつぶやいた。その言葉が鮮かに、今になって思い出される。

「私、将来、野崎先生のような女性になれば、と思っています。」

野崎先生、どうか安らかにお眠り下さい。

野崎アサエ先生追悼

寺田芳徳

光あふれ桜花らんまんあますと咲き匂う天水の丘を登り来って比治山学園に私が職を奉じたのは昭和五十六（一九八一）年であった。赴任に先立ち先生にはひとかたならぬご高情をいただいた。国文科の歓迎会に英語を担当する者をにこやかに迎え入れてくださり、安らぎとほがらかとさわやかさに包まれた思い出がよみえがって来ます。

爾来、先生は今年の春ご他界になるまで、親しくご薫陶をたまわりただただ感謝をおぼえます。今ありし日のお姿は、比治山女子短期大学における教育と研究のきびしいご表情とともに、慈母のような温顔おとめと乙女のように学問と人間形成に捧げる情熱と氣力にみちたものであります。広島生れの広島育ちの先生は太田川デルタの砂のさらさらとした淡白さとともに、もっと内なる粘着力を深く求めておられたように思います。はがねのような強さとしなやかさ、ゆた

かな包容力とかがり火のような英知と行動力は、まことに私たちの敬慕して止まないものであります。

新入生合宿オリエンテーションのために初夏の春蟬の鳴くころ訪れる「からまつ寮」での生活は、いつもすばらしい思い出を残しています。満天の星空の慈光、たんぼの綿帽子が翔んでゆく赤松の林、先生は学生と同僚と身心一体となり国文科主任教授としての指導力をいかに発揮されました。だからながながの嫌いな性格は、一同に朝夕の起床と就床の時間厳守を命じ、自ら守られたものです。生命の尊重・恩愛の真理をかかげる比治山学園の教育精神を实践せられたお姿がなつかしく偲ばれる。五訓の教えによる気品と礼節の涵養を重んじられた先生は、ゆたかな愛情とユーモアの心をもって学生と教職員にあたたかく交わられたことも忘れてはならない。天地の恵みがあり、人の和があるとき、一晚にしてバラの木が何百という花の天使を咲き出したようなよろこびを、今もなお感じます。

先生のお住居は五日市の海老山東麓の旭園にあり、西麓の潮入の港からさらに西にある私の家からは、日輪が広島の山波を紅にそめてのぼる朝まだき、屏風のような海老山の森のシルエットが霞霧のなかにふかふかとねむっているのが見える。小鳥たちもまだねむっているのだろうか。生命の恵み、その愛と希望と、永遠につづくもの、「汝もまた憩わん」と。やがてみなはらからと躍動の朝をむかえる。幽明まさに境を異にするも、先生は、霊の新しい希望の中に憩い目覚めておられることでしょう。学園教育の先達とともに、私たちの導びぎと励ましになってくださるよう、心から祈念いたします。

平安 (一九九一・七・二二)

心を育てる

片山敏之

新入学生の国文科オリエンテーションで、国文科主任の野崎先生が劈頭にお話しになる。「国文科は心を育てる」学科です。国文科の講義はどれをとっても、人間の心と関係のないものはありません。人間の長い歴史のなかで、永遠の生命を持っている文化遺産は古典です。国文科はわが国の古典と、じっくり取り組むことができるといふ恵まれた環境だと思います。……」

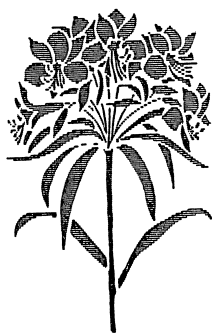
野崎先生の学生への講話は、明解・理路整然として澁むところがない。かなり早口ではあるが、よく通る声で流れるようおっしゃる。五十余年間、国語国文の教育一筋に生き続けた先生の、どっしりとした御経験が、ゆるぎのない自然の貴様となって噴出して感じる。先生の講話の内容を具体的に・詳細に再現はできないけれど『国文科は心を育てる学科です。』とおっしゃった言葉の響きは、消えることのない余韻となって、今も私の脳裏にハッキリと焼きついている。

先生は若き日、広島文理科大学の国語国文学科を御卒業になり、鹿兒島の高等女学校で最初の教鞭をおとりになった。その後、数々の貴重な御経験をとおして師弟の関係を深められ昭和48年4月、広島大学を退官されて比治山女子短大へ御就任になった。爾来十七年余り、教え子の数は余りに多く数え切れない。その先生は、痛恨のあの御急逝の前日、お見舞いの人へ元氣よく比治山短大の卒業式に列席したい由を話されたと聞く。先生はいつも学生と一体となった

人生しか、お考えにならない日々であったのであろう。まことに師弟一如を地で歩まれた貴い先生であったと思う。

先年、私は先生のこんな御側面を経験した。或る日、「わたし歯がよくないんだけど、片山先生、いい歯者さんを知っていない？」と尋ねられた。私はたまたま通院していた歯科があり、快適であったので、その歯科を紹介した。一月後のこと「片山先生ありがとう、とてもいい先生でしたよ。お蔭ですっかり楽になりました。」と丁寧に礼を言われた。私はなにか忘れていたことなので、先生の律義な御挨拶に恐縮した。先生は人からの話を疑うことなく純真に受容される方だと実感した。私が律義な御挨拶と受けとったことは、先生が生涯、純真なお人柄を持ち続けていらっしやう、何よりの証拠ではなかったのか、と今にしてしみじみ思う。

まことに野崎先生は生涯、純真を地で行く頭脳明晰な教育者であった、と心底思い慕うのである。



追慕野崎アサエ先生 七首

天 野 茂

そのかみの 袴姿の しのぼゆる 広島大文学部 女子学徒の 君

藍袴 腰高に召せる み姿の 倉野研究室に 入りますを 見し

大人しき 国文学の先輩と やさしき髪の 背を 見てし 日を

逝きませる ひと 想ひつつ 吉野なる 正行の歌を かへらじ
と 誦む

みよし野の 桜青葉の 夏あした 鶯 鳴けり 君よ 聴きませ

はるか西の 空 澄みてみゆる 吉野みち 西行庵へは ゆく
ひとも なしに

とくとくの清水を み魂に 献げむと 掌にうけ つつみ 眼を
閉ち 居つつ

平成三年八月五日

故野崎アサエ先生を偲びて

玉澤 ミサエ

寒さ一入身にしむ今年一月の初旬、先生のご入院のことを承り、あれ程お元気で活躍のご日常であったことと本当に驚き入りしました。前回のご入院の際も遂に押し切られて目を見張るばかりのご回復であったこと故、今回も平素のご気力をもつての克服で又澗刺たるお姿に接することの出来まことを心から期待しておりますのに遂に永久のお別れとなりました。

思えば昭和五十三年国文科前主任故岡政秋先生の後をお引き受けになり、ご専門のご研究はもとより、一意専心学園の為に、とりわけ国文科の為にその向上に余念なく、又将来の学園飛躍を目指して国文科の位置づけに一方ならぬご尽力をいただいていた矢先、その成就の日を待たずに逝されました先生のお心の中をお察し申して何とも言いようのない無念さを痛感する次第でございます。

次々と思ひ出は限りなく、今尚、眼前に彷彿とし蘇ってまいります。常に壯者を凌ぐ颯爽たるご態度は極めて印象的で、特に会議などでの情熱に満ち溢れたご発言は今も心に深い感銘を受けております。時にきびしくお諭し下され、時にやさしく労りのお心をもってお教え下され、私達は先生を日頃よりこの上なき国文科の主任として仰ぎ、又慈母に接するが如く何時も心からお慕い申しております。

特に私ごと、永い間短歌のご指導を賜り、その一語一語にこもる意味合いのきびしき、その悠遠なる真意に触れることの難かしき、

等々、漸くその理解の緒につかんとした折も折、俄かに先生のご逝去に遭遇し、只々茫然として、悔恨の念やる方なき昨今、今更ながら十分なご期待に添えなかつた自分の迂闊さを恥じ、心からお詫び申し上げ、ご冥福をお祈りする次第でございます。

左に拙い作を記して先生のご恩をお偲び致したいと思ひます。

面会の許されしと聞きて早速お見舞に伺ひて

おづ／＼と病室を訪れし我を見て喜び給ふ晴々として

ご逝去の悲報に接して

師の君の突如の訃報に我は又なす術すべなくて心乱るゝ

限りなき御教へ偲ぶ虚しさよ報ゆる術なき今日にもあるかな

有難さ一入にして

添削の御教へありて歌毎に改めて知る語句のきびしさ

歌ならぬ歌を作りて添削の厚き情に頭下りぬ

合掌

野崎アサエ先生のこと

重見一行

野崎アサエ先生の思ひ出を語れ、という事である。私も九年間先生の薫陶を得たのであるから書かせていただく事も多い。しかし、この特集では、私などよりもっとふさわしい思ひ出を、お寄せ下さ

る方も多い事であろうから、私は、今にして思う、国文科科長としての野崎先生について、一言させていたどころと思う。

比治山女子短大が、国文科をもって発足した点において、以来国文科は全学の中核的位置を占めて来たと思われる。そして、特に清水文雄先生が学長になられて以後、その国文科をまとめる重責を担われたのが、野崎先生であった。その「まとめる」とは、当時においては、単に教員の和を保つと言うような事ではなかった、と私は思う。というのは、比治山短大国文科が、新設の大学の学科として当然既存の大学から、大学としての体面と実力を保持するための、色々な「型」を模し、維持し、しかも比治山短大としての独自の教育方針を實踐してゆくための運営が、その「まとめる」の中に入らなければならなかったと思われるからである。そして、そういう「型」は、既存の大学に身を置き、経営的立場からする思考の経験を豊富に有している事が必要であり、そういう「型」を積極的に具体化してゆける立場にある人とは、他ならぬ野崎先生だったのである。特に私どものような、年は喰つても、その点に極めて無知な者や、若い先生方も多い中では、「まとめる」とは、右の経験と共に、極めて多様な能力と強い意志を必要としたと思われるのである。私などは、その無知のために、時には野崎先生の専横を感じる事もないではなかった。しかし今、私も既存の大学で同じ立場に立ち、人事教授会の末席に身を置いてみると、当時の野崎先生の御苦労と御功績を思わずにはいられないのである。

ふさわしくない内容で、伝統ある八たまゆらVの誌面をけがすのもこれくらいにして、野崎先生の御冥福を心からお祈りする次第である。

一期一会の旅なれど

宇野憲治

会者定離この人の世の常なれどさらに悲しきいのちのわかれ

三月十六日午後二時、敬愛してやまなかつた野崎アサエ先生がなくなられた。

三月十五日、卒業式、その後の謝恩会……その夜私は、サイクリング部の付添いもあって、夜の九時半、あわただしく、広島から別府へと船で旅立った。翌日は雨で、所によっては雪となるような寒い一日であった。別府から由布院へ、由布院から長者原へ……、その寒い一日を、学生五人と共に自転車をごぎ続けた。かなりきつい坂が続いたのだけれど、体は一向に温まることはなかった。久重山山麓長者原の宿に着いた時には、風景を楽しむというよりも、一刻も早く暖を取りたい心持ちであった。湯につかり、心地ついた後、今日一日の無事を知らせるため大学に電話を入れた。その電話によって逆に知らされたのは、こともあろうに、恩師と仰ぐ野崎先生の訃報であった。

野崎先生は、一月末、一時入院されたものの、三月初には元気に退院され、四月からの講義を楽しみにされているとお聞きした矢先だった。その先生の思いがけない訃報に接し、実感を伴わないまま、いろいろな思いが一時に脳裏をよぎって行った。

翌十七日は、無情なくらい明るくよく晴れた日であった。久重山

の頂には積雪が鮮やかであり、空はあまりにも悲しく青かった。

思ひきや旅の途上で聞く計報青空のもと雲湧きて消ゆ

ふと、梶井基次郎の短編「蒼穹」の一節が心に思い浮んだ。

一方からの尽きない生成とともにゆっくり巡回していた。また一方では巻きあがって行った縁が絶えず青空の中へ消え込むのだった。こうした雲の変化ほど見る人の心に言い知れぬ深い感情を喚び起こすものはない。その変化を見極めようとする眼はいつもその尽きない生成と消滅のなかへ溺れ込でしまひ……

という一節である。人間の生と死と、山頂にかかる雲の生成と消滅と……。まさに死を見つめた眼が、この生を見返している。

こんなによく晴れた青空の下、遠く広島で恩師野崎先生が永遠の眠りにつかれた……。明日十八日午前十時から葬儀とのことであるが、学生を引率して来ている私は、帰るに帰ることもできない。あれこれと気がつくだけの手配だけは済ませ、学生と旅を続けた。「やまなみハイウェイ」での風景はあまりにも美しすぎた。その夜、阿蘇山の麓に宿をとった。明日は久しぶりに阿蘇の日の出が見られるかも知れないと宿の主人が言った。午前六時二十分、外輪山の一角からほぼ真東に太陽が昇るといふ。いろいろなことと思ひ、寝つかれない夜であった。

言の如く、翌朝東天に素晴らしい太陽が昇った。

阿蘇めぐる外輪山のシルエット真東天まとうてんに光いのちのいずる

大阿蘇の全山燃えて日の出かな

生と死のドラマ、遠く離れた阿蘇の地で、こうして、日の出を見つめている自分、本来なら今日の葬儀にかけてけるであろう自分、本当に感慨深いものがあつた。十時、十二時の二回、自転車止め、学生と共に、先生の冥福を祈つた。眼を開けた時の太陽は、痛いほどまぶしかった。こんな孤独な、大自然の中での見送り方もあつたのかと、眼前の風景を心に刻みつけた。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

（『奥の細道』）

旅にあつた私には、人の生と死とが実感をもって刻印された。一期一会の旅だつたと思つた。

病室にて

小林 美和子

野崎先生が逝かれて、早いもので半年が過ぎてしまいました。主任として国文科をまとめてこられた先生を失つたことは、国文科として大打撃でした。比治山女子短期大学をこよなく愛されていた先生に、せめて、あともう五、六年は、この短大を見守っていただきなかつたという思いは、今なお強くなるばかりです。

今、改めて振り返ってみますと、私と先生との付き合いは、十

有余年に亘ります。初めて先生にお会いしたのは、比治山女子短期大学の先生の研究室に、私が新任の御挨拶に伺った折のことでした。以来、二年間程、先生とは同室の間柄となり、教師としての心構えを一から御指導いただきました。又、折に触れて、先生からは、初めて赴任された鹿児島のお話や、お好きなタバコを吸われるようになった福山時代の思い出話などを聞かせていただきました。が、一番鮮明に思い出されますのは、生前に接しました最後の、広島総合病院でのお姿です。お見舞いに伺った時刻には、病室に先生のお姿はなく、廊下でしばらくお待ちしていますと、パジャマ姿の野崎先生が向こうから歩いて来られて、「あら、あなただったの。ちょうど良かった。あなたを、この間から待っていたとこよ。」

いつもの調子で気さくに、にこやかに声をかけて下さいました。病室に入られると、野崎先生は堰を切ったように、病室の話題としては、およそ不向きな、国文科の将来について、特に、四年制大学設置に関するお話をされました。込み入ったお話を伺いながらも、私には、入院中位せてのんびりされたらいいのに、という思いばかりがしておりました。

話終えられると、先生は、「ああ、これで気になっていたことが片付いて良かった。」と仰言って、引き出しの中からキャンデーの袋を取り出し、封を切ってから差し出され、いかにも一段落したというお顔をされていました。御自分のお体の痛みについては、ほとんど触れられず、最後まで短大のことばかりを考えておられた野崎先生の熱意には、ただただ頭が下がりましたが、病院を後にした私には、何か気になる宿題を出されたような気分が残りました。

それから間もなく、野崎先生の訃報に接し、回復されることしか

予想できなかった自分の迂闊さに、愕然となりました。

比治山女子短期大学は、確かに今、一つの転機を迎えており、先生が最後まで気にかけておられた国文科の将来は、必ずしも順調とばかりはいかないでしょう。しかし、国文科のスタッフ一同が協力して、できるだけ先生の御期待に添えるよう、頑張ってくださいたいと思います。先生も、どうか、霊界から私どもを暖かく見守ってくださいますように。

つつしんで、先生の御冥福をお祈り申し上げます。

野崎先生のこと

吉 山 裕 樹

考えてみると、十年程前私が短大に勤めさせて頂くようになったきっかけは、野崎先生が心臓を悪くされ、授業時間を軽減される必要があって、私とその補いをするということであったように思う。勤務しはじめた時には、すでに回復されて、国文科の主任のお仕事とともに授業も担当なさっていた。それからどれ程の時が経過したか覚えていないが、ある時先生が私の研究室のドアをノックされ、「ちょっといいかしら」と声をかけて入って来られた。私は性来粗忽者であるから、何か叱られるようなヘマをやったのではないかと、突差にあれこれ考えつつ緊張していた。すると、にっこりなかって煙草を一本御所望ということであった。叱られるのではなかったとホッとすると同時に、心臓を悪くなさって療養されたことをお

聞きしていたので、素直にお渡ししてよいかどうか迷い、その旨申し上げたが、あえての御所望であったので差し上げた。その折の先生の笑顔が何とも言えず、失礼な申しようであるが、かわいいという形容が最もふさわしいように思われた。

それから、研究室が隣合わせということもあり、帰路が途中まで同じということもあって、身近な気分でおつき合いさせて頂き、度々笑顔を拝しているうちに、私の野崎先生像は、再び申し訳ない言いようであるが、かわいいおばあさんということで固まっていた。勿論客観的に見れば、科の主任という指導者と、いつまで経っても未熟な教員の関係に他ならないのであるが、そういう関係のブレッシャーを感じずに過ごさせて頂いたのは、私が勝手に先生を自分のおばあさんのような存在と拝していたゆえであり、そのように思わせて下さった先生のお人柄ゆえである。

お亡くなりになって三か月半が経過したが、いまだその実感が湧かない。いつかまた研究の机に着かれ、にっこりとなさっている姿を拝することがあるような気持を拭えない。

野崎先生を偲んで

青木美保

失った後になって、その存在感や重みをつくづく感じさせる人がある。私にとって、野崎先生は、そういう人であった。

先生の訃報に接したとき、私は、突き放されたような依り所の無

さと、不安に近い淋しさを感じた。しかし、生前、特に先生にお目をかけていただいたということではなく、近しいお付き合いをしていただいたということがある訳でもない。先生は、愛嬌のある御性格で、お茶目なところもおありになり、親しみ深い方ではあったけれども、一方、毅然とした態度で、自己の尊厳を保っておられるところも感ぜられ、私などは、そのようにくだけた態度で先生に対するのは失礼だと感じていたからである。

だが、先生は、折りにふれて、心に残る、微妙な心配りをして下さった。例えば、私の場合、子供を持ちながら仕事をしていることに対して。また、教師という仕事についての御指導、御助言など。それらの御好意は、すべて私の胸にしまわれている。おそらく先生のお側におられた方は、皆、そういう恩恵を受けられたであろうと思う。

勿論、先生からお叱りを受けたこともあるし、物事の感じ方について世代の差を感じたこともある。だが、次第に、特にこの一、二年、自分の背中に、先生の漠然とした存在を感じる事が多くなったように思う。それは、自分の存在を背後から全的に受けとめてもらっているという安心感だと言えよいか。そういった存在感を、先生はお持ちだったと、お亡くなりになった今、強く感じる。そう感じるのには、いくぶんかは私の年令のせいもあるかもしれない。三十を過ぎて、あたりを見廻せば、自分を見守ってくれる人は、一人去り二人去り、心細いばかりなのである。またもや失ったという喪失感から、暫く抜け切ることができなかった。

先生が残されたものの中で、私が好きなのは、先生の随筆風の文章である。特に、「女性文化研究センター年報」第四集所載「ある

女教師の生い立ち」と、比治山女子短大図書館報「らいぶらり」28号所載の「遊覧船「るんるん」に乗って」の二篇が好きである。これを読むと、先生のお人柄が、先生の愛されたお母様譲りのものであることに思い至る。また、先生が故郷広島をこよなく愛されていたことも強く感じられる。「ある女教師の生い立ち」には、今はない戦前の広島町の並みかみごとに描き出され、不思議な幻でも見るように、断絶した広島島の生活の営みがつなぎ合わされていく。また、遊覧船「るんるん」の船上からは、先生は四五度下という思いがけない視点から、現在の広島島の美しさを描き出しておられる。

これらの文章は、今広島島に生活する私達への何よりの贈り物である。この贈り物を味わいながら、しばし、先生の御不在を慰めたいと思う。

野崎先生を偲んで

蔵 田 令 子

卒業後、二十二年ぶりに我が卒論を手にいたしました。思いもかけない懐かしいものとの再会は、ハラハラと涙が落ちる、不思議な感動でございました。お聞きすれば、御指導頂いた浜本先生から、諸先生方を経て、野崎先生のお手元へ、行き着いたとのことでした。つたない卒論を、捨てず、焼かず、みんな保存して頂き、どれ程先生の生活空間を、お邪魔いたしましたことでしょうか。頭の下がる思いでした。卒論を介した、野崎先生との再会は、届けてくれた友人との出

会い、懐しい先生方とのふれあい、母校での、王朝女流文学史の聴講へと、限りなく拡がりゆき、やわらかな心ですごせた一年でございました。自ら散った、三島由紀夫氏が、一週間前の対談の中でも、公然と師として、敬愛された清水先生の御講義は、一つ一つの言葉を、丁寧に、大切に、扱われます。一声も聞きのがすまいと、必死の聴講です。ああ、若き学生時代、この姿勢であり得たら、と野崎先生に、お話ししました。先生は、「学生には、それだけの欲がまだないので、それを教えないと……」。授業中のむだ話など、私は、厳しく叱ります。」と、齒に衣着せぬ、先生らしい、卒直で、慈愛に満ちたお言葉でした。

去年の夏の終り、先生との会食の機会に恵まれました。万年童女のような先生は、天真爛漫に、よくお笑いになり、よくめしあがり、幼い頃からのエピソードを、亡きお母様の思い出と共に次々語られました。とてもお幸せそうで、私共も、心あたたまり、楽しいひと時でございました。その時の、先生の一筆は、墨色も豊かで清々しく、大らかでふくよかな、美しい文字です。

教え子も

料理も美しき

晩夏かな

ただただ先生の御冥福を、お祈り申しあげます。

(一回生)

野崎先生を偲んで

濱 本 智 子

そろそろ夕飯の仕度に取りかからなければと思っている頃、電話が鳴りました。訃報でした。一瞬、私の頭の中は、まっ白になり、野崎先生の「荒城の月」を朗々と読まれるお声とお姿が脳裏に浮んできました。

先生に初めてお会いしたのは、短大の入学の日、私たち国文科一組の担任でした。何に対してもきびきびしていらっしゃって、ちょっとびり恐そうというのが、私の第一印象でした。

でも、先生はとても茶目だったついで、大らかで、そして、厳しい言葉の中にも、いつも心暖かいものを持っていらっしゃいました。

在学中はもちろん、卒業してからも、よく研究室をお訪ねしました。その度、いつも笑顔で迎えて下さいました。どんな相談で伺っても、先生とお話をしていると、不思議と気が楽になり、力が湧いてきました。

最後に、先生の研究室をお訪ねしたのは、私の結婚が決まり、結婚式での御祝辞を賜りたいとお願いに伺ったときです。「いいわよ。私はお世辞なんか言わないからね。あなたの悪口をいっばい並べるわよ。」と笑っておっしゃっていました。当日、どんな悪口が飛び出してくるか、戦々恐々としておりましたが、こんなにも私を理解して下さったかと思うほど、胸がジーンと熱くなるようなお言葉でした。

野崎先生。私は先生の葬儀から帰った夜、結婚式のビデオを巻き戻し、あのお言葉を聞きながら涙しました。先生が、毎年年賀状で「研究室へ遊びにいらっしゃい。」と声を掛けて下さったのに、とうとう実現できずじまいだったことが悔まれてなりません。もう、研究室のドアを叩いても先生のあの笑顔はないのですから。

野崎先生と出会えたことを感謝すると共に心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合 掌

(旧姓 佐々木 十三回生)

野崎先生を偲んで

山 本 奈 津

先日、短大からの連絡で、野崎先生がお亡くなりになったことを知り、大変驚きました。

数年前、卒業以来初めて、山陽本線の電車の中で偶然お会いした時には、あの和やかな笑みを満面にたたえて、久々の再会をとても喜んでくださいました。それ以来、お会いする機会もなく、今となってはもっとお話をしていれば、と悔やまれてなりません。

私は、女性らしい感覚でお話しして下さる先生の国文講読の講義が大好きで、一言一言を聴きもらすまいと神経を集中させていたのを、昨日の事のように覚えていきます。

二年生になり、卒業論文のテーマに平安女流日記文学を取り上げ

ることを決めた時も、迷わず先生にご指導をお願いしました。最初のうちは、自分の思いばかりが先行して行き詰り、悩んだりしましたが、その壁を乗り越えるきっかけになったのは、先生の的確なアドバイスでした。それ以後、面白いように研究がはかどり、書き上った論文を読んでいただいた時も、出来栄えをほめて下さった先生の笑顔が、私の苦勞を一気に吹き飛ばしてくれました。その卒業論文は、私の短大生活の全て——と言ってよいほどの宝物で、論文が載った「たまゆら」は、先生と私をつなぐ絆として、大切に本棚の中にしてまつてあります。

野崎先生、お導きくださいまして本当にありがとうございます。二年間の講義を通じて、お教えいただいた教訓は、今も変わらず私の心の中に生き続けています。そして、先生のあの穏やかな優しい笑顔をいつも持てる女性になりたいと心に決めています。つつしんで、ご冥福をお祈り申し上げます。

(旧姓 保澤 十三回生)

想 い 出

澤 田 淳 子

野崎先生は、短大の二年間を通じて私の学級担任でいらっしやいました。また、卒業論文作成の折にも先生にご指導をいただいた思い出があります。先生の講義が「平家物語」であると知ってすぐ、私は研究室に伺ったのでした。先生はにこにこなさって「頑張りな

さい」とおっしゃいました。もう十年以上前の事になりますが、私にはつい昨日の出来事のように思えてなりません。研究室をお訪ねするたびに、先生はあのいつもと変わらない優しい笑顔で私を迎え入れてくださいました。お話しするのが楽しくて、長い時間おじゃましてはご迷惑をおかけしたように思います。野崎先生のご指導により論文も完成させる事ができましたが、卒業により先生とお別れしなければならぬということは、私にとって大変淋しいことでした。

卒業後も年に一度の大学祭にはほとんど足を運んでいます。必ず野崎先生にお目にかかれるとは限りませんが、それでも懐かしい研究室の前まで伺うことだけでも気持ちと和んだのです。卒業後初めての大学祭で先生にお会いし、就職先のことをお話した時、先生は「楽しい」とお聞きになりましたので、「はい、とても」とお答えすると、「そうでしょう、あなたの顔が輝いている」とおっしゃいました。私のことを案じてくださり、仕事が順調であるのを大層喜んでくださった先生。その懐しい野崎先生が本当に今はいらっしやらないとは何としても信じられない思いです。

三年前の大学祭のお茶席で、席入りされる先生を拝見したのが最後となりました。いつかまた大学へ行き、野崎先生の研究室を訪問しても、もう二度とそこに先生の御姿を拝する事はできません。

時間が経つほど悲しみは増して、これ以上何と言ってもいいかわからない次第です。

(十五回生)

野崎先生と煙草

瀬尾幸恵

三月十六日、僅かに雪の残る線路脇を通り抜け、川面を右手に見つ病院に向つた。八階のエレベーターが開くと、病室の前で荷物を持っておられる野崎先生の妹さんの姿があった。娘さんが「亡くなったのよ。」と怒り共哀しみ共つかぬ声で告げられた。茫然とした目に、病室を行き来する看護婦さんと白い幕で覆われたベッドが映つた。学校に連絡を、と思ひ立ち電話をしたが、既に連絡は入つていた。「大変だるうけど宜しく頼みますね。」その言葉に、堰を切つた様に涙が溢れ出した。

学生時代、入学オリエンテーションの時に科の主任の挨拶があつた。首を上向き加減に傾け、氣迫に満ちて「国文は、文学や言葉を通して心を豊かにして行く科です。」とおっしゃつた野崎先生の言葉は、何となく国文科を選んだ私の心に強く響いた。また独特の節回しで語られる先生の『平家物語』に聞き惚れ、卒業はぜひ野崎先生に見て頂きたいと、苦手な古典に取り組んだ。卒業式の日、友人と騒ぎながら「卒論を取りに来ました。」と告げた私に、「卒業論文を頂きに上がりました、でしょう。」と間髪を入れずおっしゃられ、赤面したのを覚えてゐる。また「昔、言葉は言霊と言つて靈力がある信じられていたけど、確かに言葉はその本人の魂(心)が表われているもので、文字の様に形としては残らなくても、口から出たちよつとした言葉が、受ける人の心に残ることもある。」と伺つたことも印象に残っている。

野崎先生はよく「短大は、学問だけでなく、社会に出て本人が困らない様態をするのも大切だ。」とおっしゃつていた。元来のんびりしている私が何とかここまでやって來たのも、野崎先生のご指導と励ましがあつたからだと思ふ。接待から書類の書き方、果てはみかんの食べ方に至るまで、時にはちゃめつ氣を交えながら教えて下さつた。「あなたになら出来ると思ふから、仕事を頼まれるのよ。頑張りなさい。」と言う励ましの言葉は働く原動力となつてゐる。挫けそうになる時、今はもう聞く事の出来ないこの言葉をよく思い起す。

そして、野崎先生と言つて想ひ出されるのは「煙草」だ。就職したての頃、先生が煙草を吸われるのを見て驚いた。考え事の最中や食後に、ゆったりとした動作で煙草を嗜まれている姿は実に様になつてゐた。吸殻は殆ど残して揃えて置かれ、几張面な先生の性格を物語つてゐた。煙草入とライター入も共に先生ご自身かギ針で編まれた物で、手先も大変器用でいらした様だ。いつだか「母の煙管姿が様になつて、大人になったら煙草を嗜みたいと思つたの。」と話して下さつた事がある。先生にとつての煙草は、お母様の想ひ出に繋がるものだったのかも知れない。

その煙草も、入院されてからは止められていたそうだ。「早く退院して学校に行きたい。後期試験や卒業論文も見なくては。」と口癖の様におっしゃつてゐた。退院されてからも煙草は口にされず、これを機会に煙草を止めると娘さんに約束をされていたそうだ。再入院、そして突然の死。無言のご帰宅。いつもご自身で奇麗に編まれている髪を、最後に編んで差し上げたのに、その冷たさを覚えてゐるはずなのに、未だに先生の死が信じられずにゐる。

時折、煙草の気配に先生を感じる事がある。案外来世で、お母様とご一緒にゆっくり煙草を燻らせておられるかも知れない。「頑張りなさい。」と声をかけて下さっているかも知れない。

(十六回生)

野崎先生の笑顔

大江 実 琴

初めて野崎先生にお会いしたのは、入学式の次の日の、オリエンテーションの時でした。

そのオリエンテーションの折、国文科の主任ということで野崎先生が壇に立たれました。そして、入学してすぐの私達の前で先生が強調された言葉は、「初心を忘れず」ということでした。この言葉は一般的によく言われる言葉で、以前私も何度か耳にしたことがあったはずですが、この時初めてこの言葉を聞いたような気がしました。「初心を忘れず」という言葉の内容を深く考えたのが、この時はじめてだったからです。

ただなんとなく入学し、強い目的意識も持たずその場に座っている私にとって、その言葉はとても新鮮で、短大生活について積極的に考えるきっかけになりました。

先生は授業においても、「自分を育てなさい」ということをよく言われました。詩の授業で、「自分を育てている人は、何もかも育てている。自分ですべてを受けとめ、自分を育てることが必要で

す。」という意味のことを言われました。私は困難な場にぶつかる時、いつも逃げることでしか考えていませんでしたが、先生の言葉を聞いて考えを改めることが何度かありました。

先生を思い出す時、いつも笑っておられます。先生がいつも笑っておられた、というのではないのですが、笑顔の印象がとても強いのです。

先生は、戦争中の体験を話して下さったことがあります。私には想像もできないような体験を話して下さいました。生きてこられた分だけ、戦争の体験のように苦しいことや悲しいことがたくさんあったことと思います。

そんな苦しみや悲しみを何度も感じてこられた先生だからこそ、周りの人をも笑顔にするくらいの純粹な笑顔をされ得たのか、と考えます。その笑顔は、先生がずっと育て続けてこられた「心」だったのだと思います。いつも言われていた、「心を育てること」の生き方そのものが、あの笑顔だったのだと思います。辛いことや悲しいことがあっても笑顔のできる人というのは、豊かな心の持ち主ではないのでしょうか。

本当に先生が亡くなられて残念です。先生が心を育てられた過程において経験されたことや、多くの人との出会いの話など、もっと聞いておきたかった話がたくさんありました。私も先生のように、心を育て続けることのできる人間になりたいと思っています。

(二十五回生)

野崎アサエ教授略年譜

明治42年6月25日、広島県広島市西新町24番地に生まる。

昭和2年3月、広島県立広島高等女学校卒業

5年3月、広島女子専門学校国文科卒業

5年9月～6年2月、広島県比婆郡山内西尋常高等小学校

代用教員

6年3月～4月、同校訓導

9年3月、広島文理科大学国語学国文学科卒業

9年4月、鹿児島県女子師範学校教諭兼鹿児島県立第二高等女学校教諭

18年4月、鹿児島師範学校助教

21年2月、広島女子高等師範学校教諭

22年5月、広島女子高等師範学校教授

24年6月、広島女子高等師範学校教授兼広島大学助教

26年3月、広島大学教育学部助教

47年4月、広島大学教育学部教授

48年4月、比治山女子短期大学国文科教授

54年4月、比治山女子短期大学国文科主任

平成3年3月16日、在職中に永眠す。満81歳。

研究業績として、「若菜集私見」(『国文学攷』第2輯)、「民謡」(『薩藩家庭教育の研究』「家庭教育と文学」の部)、「立原道造ノート―出発期の作者と作品―」(『国文学攷』第23号)、「日本のコミュニケーションの在り方について」(『国語教育研究』8号)、「立原道造研究ノートⅡ―抒情の詩的資質の基調について」(『広島大学教育学部紀要』第二部)、「立原道造研究ノート―村ぐらしと女性たち」(『国文学攷』第50号)、「立原道造とソナタ形式」(『比治山女子短期大学紀要』第10号)、「明治の母娘」(『広女国文』第5号)などがある。

本学では、主として、『平家物語』『世間胸算用』等の国文講読を担当された。また、在職中は、入試委員(昭54～)・紀要委員(昭54～)・運営委員(昭55～)・同和教育委員(昭60～)・教育実習委員(昭62～)・女性文化研究センター運営委員(平成元年～)等の要職に就かれ、豊かな学識による貴重な意見を述べられ、短大運営に多大な貢献をされた。更に、国文科の主任教授兼国文学会会長として、『たまゆら』刊行、卒業論文の指導、研修旅行の引率など、教育内容の充実に専念され、その功績は多大なものであった。

昭和63年7月、比治山学園15年勤続者として表彰さる。

平成2年10月、文部大臣教育功勞者として表彰さる。